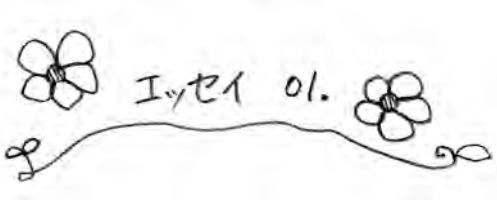

しろくてまるいとりの話

鳥とともに過ごす生活というものを十二年送った。その間、三羽の手乗り文鳥と出会った。今日は、その中でも、三代目の、しろくてまるくて、もっちりとしたプーちゃんの話をしようと思う。

生まれも育ちも町の真ん中、県庁所在地であるにもかかわらず子どもの頃の私は、にわとりの鳴き声で朝を知るという生活を送っていた。小学五年生のとき、おじいちゃんが気まぐれを起こし、ウズラチャボのつがいをもらってきたのだ。私の動物アレルギーと弟のぜんそくのため、犬や猫を飼うことを諦めざるを得なかった我々にとって、このチャボの夫婦は初めての「毛が生えた」ペットであり（それまでは、カメしか飼ったことがなかった）、しかも元来、私は鳥のずんぐりむっくり感が、内的な何かを刺激するのだ！というほどに大好きだったため、おじいちゃんのこの気まぐれは、正に大歓迎といったところだった。

当初はうさぎ小屋の担当になることが目的で入った飼育委員会でも、私は気がつけば進んで、みんなが恐れるにわとり小屋を担当するようになっていた。今にでも飛びかかってきそうな白色レグフォンを「可愛い」と言っていたのは、おそらく私だけだろう。

知り合いの大工さんに頼んで作ってもらった鳥小屋は、チャボだけを入れておくにはあまりに大き過ぎた。そのため、これまたおじいちゃんの気まぐれで、十姉妹、朝鮮うぐいす、そして文鳥が投入された。

ああ、おじいちゃん、もっと計画性をもって鳥を入れよう。

可愛らしい見た目とは裏腹に、フィンチきっての凶暴さを持つ文鳥は、細々と生活する十姉妹ファミリ

ーの家を乗っ取り始めた。体重十グラムそこそこの十姉妹が健気に造った巣に体重三十グラムほどの、でっぷりした文鳥が堂々と居座っている光景が次第に日常になってきてしまった為、やむなく文鳥一家は隔離された。二階のベランダに、母が鳥小屋を造り、そこへ彼らは移動した。そうして文鳥一家は、まんまと手に入れた「文鳥帝国」で一大国家建設に励み始めた……つまり、大繁殖をしたのである。

初代手乗り文鳥のメーちゃんは、国家建設中の権力争いに巻き込まれて、国を追われた姫であった。早い話が、生まれつき体が弱かったため、厳しい文鳥界の掟に従って親鳥に捨てられたのである。冬のある朝のこと、母が、水入れの中に突き落とされ凍死しかけていた哀れな桜文鳥の雛を見つけて保護した。それがメーちゃんである。そうして否応なく雛を飼育することになり、我が家の手乗り文鳥の歴史が始まったのである。

およそ、一年後、メーちゃんと同じように、今度は真っ白な雛が小屋の隅に落ちていた。それが二代目のピッキーである。メーちゃんとピッキーはメス同士ではあったが、妹分のピッキーが、徹底して姉貴を慕っており、それなりに仲良く過ごしていた。

小粒だったメーちゃんは、わずか五年で他界した。残されたピッキーは相棒を失い、ショックで半狂乱になった。毎日毎日、「ギャッ！　ギャッ！」と叫びながら、メーちゃんを捜して家中を飛び回ったのである。「鳥頭」なんて言葉は一体どこの誰が生み出したものなのか。ピッキーは一週間経っても、一向にメーちゃんを忘れる気配を見せなかった。

このままでは、ピッキーが寂しさで死んでしまう。そう判断した我々は、彼女に新しい友達を与えるこ

とにした。そこで連れてこられたのが、我が家の手乗り文鳥・三代目になるプーちゃんである。

季節は冬。文鳥の繁殖期は、春と秋である。市販の手乗り文鳥探しは困難を極めた。

数件回ってようやく父と母が辿り着いたペットショップでは、桜文鳥と白文鳥の二羽の「売れ残り」が待っていた。

「桜の方がメスで、白の方がオスですね。ただ、ずいぶん育ちきっているから、今から人間に懐くかどうか……」

と、ペットショップの店員は心配そうに呟いたという。

亡くなったメーちゃんは、前述したように、黒い頭と灰色の羽根が美しい桜文鳥だった。ピッキーにとっても、見慣れていた桜の方がいいだろう、と、父と母はその場で合意し、桜文鳥のメスを購入することに決めた。

しかし、いざ、その桜文鳥を箱に入れ（ペットショップでは、鳥を小さな紙箱に入れてお客に渡す）、店を出ようとした正にそのとき、父が、おじいちゃん譲りなのか知らないが、気まぐれを起こした。

「なあ、もう一羽の白文鳥の方がいいんじゃないか？　あっちの方が人間に慣れてたような気がする。それに、ピッキーはメスだし、オスの方が仲良くなるんじゃないか？」

一羽残された白文鳥が、背後から放ち続ける執念オーラに、父はまんまとはまったのである。

つづきは本誌で…！